

かわらばん

第28号 2019年10月22日



「戦争への道」辿るTVドキュメンタリーを観て……坂元良江
性暴力が民主主義社会の構築を妨げる……角田由紀子
最近の日韓・日朝関係について考える——二つの集会から……伊東 輝
「米軍が最も恐れた男 その名はカメジロー」「カメジロー 不屈の生涯」
希有な政治家を通して沖縄の抵抗の精神に触れる……三井ふみよ
一票で変える女たちの会・Facebook から

「戦争への道」辿るTVドキュメンタリーを観て

坂元良江

毎年八月になるとテレビは太平洋戦争をテーマにした番組を放送する。それが免罪符にでもなっているかのように。今年の秀逸はNHKの「ひろしま」だったのではないだろうか。長年日の目を見ることになった映画「ひろしま」*1を放送するにあたり、経緯を語るドキュメンタリー番組「忘れられたひろしま」*2八万八千人が演じた「あの日」*2がまず放送された。

映画「ひろしま」は敗戦から八年後に広島市民の全面協力で日本教職員組合が制作したもので、GHQの介入があり配給がストップしたままだったものだ。これほどの映画が戦後わずか八年後に制作されたこと、それが海外の映画賞を受賞しながら、日本では公開されることなく、現在に至ったことに映画関係者も驚いている様子がドキュメンタリー番組

組で紹介されていた。これについては別の機会にゆずるとして、今回は一九二五年に治安維持法が制定され一九四五年敗戦までの「戦争への道」を扱ったNHKスペシャルなどの番組について書いてみたい。

「かくて自由は死せり ある新聞と戦争への道」*3

「自由はこうして奪われた 治安維持法一〇万人の記録」*4

敗戦から一〇年ほどたった一九五〇年代、長野県の下伊那にある県立高校の生徒だった私は、地元の青年たちの読書会に参加していた。このような読書会や勉強会がかつて治安維持法の標的となり多くの逮捕者を出したこと、転向を強いられた青年教師たちが、多くの少年たちを少年義勇軍として満州に送り出し国策に協力することになったことなど知ることともなかった。満蒙開拓団にもっとも多くの人々を送ったのも長野県だったことすら知ったのはずっと後になつてのことだった。

一九二五年、日本最大の右翼メディアといわれる「日本新聞」が長

野県選出衆議院議員、治安維持法制
定時の司法大臣である小川平吉に
よって創刊された。三〇〇〇日分の
新聞が最近発見されて、この新聞が
戦争への道をどのように導いていつ
たかを検証するのが今回の番組だつ
た（かくて自由は死せり ある新聞
と戦争への道）。

発刊当時は大正デモクラシーの全
盛期、人々は西欧の文化に親しみ言
論の自由を享受し、普通選挙も実現、
議会政治が確立した時代であった。
この自由な風潮をよしとせず、天皇
の統帥権を重視し国体を絶対視する
社会への変革を求めるのがこの新聞
の目的だった。

この新聞を支援する会員一覧には
後の総理大臣近衛文麿、平沼騏一郎、
東条英機などの名前が並んでいる。

一九三〇年ロンドンでの海軍軍縮
会議で軍縮条約に署名した濱口内閣
を、天皇の統帥権の干犯であり憲法
違反、天皇政治に帰れ、とこの新
聞は攻撃した。天皇の統帥権は大
手新聞にも支持されることとなり、
一九三〇年十一月には右翼のテロに
よる濱口首相暗殺未遂事件が起こり
議会政治は崩壊へと向かった。

日本新聞の中心的執筆者中谷武世

は、青年団活動が活発で、勉強会が
頻繁に行われ、学校教育も自由な長
野県下伊那地方に矛先を向けた。中
谷は頻繁に下伊那にかかり、村の
有力者に送ったたくさんの手紙が今
も当時の村の旧家に残されている。
下伊那の小学校音楽教師小林八十吉
は自分で買ったピアノを学校の教室
に置き、子どもたちに音楽をとおし
て芸術教育を行うリベラルな教師
だった。中谷は小林八十吉をター
ゲットとし切り崩しを行ってゆく。
集会で歌を唄うから手伝ってくれ、
若い人たちを指導してくれとの誘い
が最初だった。

一九三一年、満州事変が勃発、関
東軍が中国東北部を占領した。日本
新聞はこの戦争を「聖戦」と書いた。
この年から治安維持法の検挙者は東
京、大阪など大都市から地方へと拡
大してゆく。制定当時はロシア革命
の影響を恐れ、共産党の取り締まり
を目的とした治安維持法は一九二八
年に改定され「目的遂行罪」なるも
のが加わった。友人と読書会を行っ
ただけでも検挙できるものとなり、
生き生きとした子どもたちの群像
を描いた画家の青年が、友人との親
睦会に参加していた印刷工などが突

然逮捕されることが続いた。（「自由
はこうして奪われた 治安維持法
一〇万人の記録」）

一九三三年二月四日、長野県で
六〇八人が目的遂行罪で逮捕され
た。二・四事件といわれるものでこ
の後こうした逮捕は全国に広がっ
た。目的遂行罪には「緊急勅令」と
いう制度があり、この大量逮捕はこ
の制度によるものだった。この「緊
急勅令」は本来災害などの時に適用
されるものだった。治安維持法は現
在の共謀罪と、緊急勅令は安倍改憲
案の項目の一つ緊急事態条項に重なる
ことに愕然とする。そして「日本
新聞」は現在の日本会議と目的を一
にしている。歴史が繰り返されつつ
あることを伝えていることに視聴者
はどれほど気づいただろうか。

この二・四事件で逮捕された
六〇八人のうち二三〇人が教師だつ
た。教師たちは教壇を追われ教え
子たちと引き離された。ちなみに
二三〇人の教師には共産党員は一人
もいなかった。組合活動に参加、研
究会、読書会をひらいた、本を読ん
だなど逮捕の理由は何でもありだつ
た。教師たちは転向を強いられ、八
割にのぼる教師たちが転向表明をよ

ぎなくされた。転向表明をした教師
たちは職場への復帰を許され、引き
換えに国策への協力を求められるこ
ととなる。

日本新聞の中谷武世の影響を受
け、「芸術による自由な学校教育の
時代は去った」と教師を辞した小林
八十吉は軍隊による天皇統帥権の拡
大を主張するようになり、美濃部達
吉による天皇機関説に反対するデモ
に長野県から参加した。後にこの経
費は陸軍から出ていたことがわか
る。教壇に復帰した教師たちは、満
州への進出を国策とする政府から、
教え子たちを青少年義勇軍として満
州へ送ることを求められ、割り当て
に沿って六五一六人の少年たちを満
州へ送った。

一九三五年、日本新聞は、役割を
終えたと、感謝の言葉を残し一〇年
の活動を終え休刊した。戦争への道
を開いた一〇年だった。この後日本
は大東亜戦争へと突き進んでゆく。

今も残されている小林八十吉の日
記は敗戦直前から八月一五日までの
一か月の部分が破り取られている。
教え子たちを満州に送った教師は、
少年たちの死は自分の責任であると
苦悩する。希望に燃えて教壇に立つ

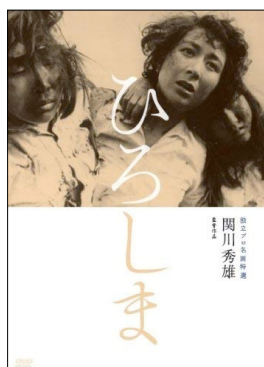
た若き教師たちが「転向」という「汚点」を抱えて一生を終えたであろうことを思うと胸が痛む。

一九八〇年代になり、中国から満蒙開拓団の残留孤児、残留婦人が大勢帰国した。長野県でも彼らへの支援が始まり、後に満蒙開拓団平和祈念館が設立されたのは、全国で一番多くの開拓民を満州に送った長野県だからであつただろう。

「村人は満州へ送られた」^{＊5}「国策、七一年目の真実」^{＊5}「告白～満蒙開拓団の女たち～」^{＊6}「彼らは再び村を追われた 知られざる満蒙開拓団の戦後史」^{＊7}と満蒙開拓団の番組の数々に再び思いをはせている。同時に早くから満蒙開拓団の調査記録を書いてきた長野県出身の作家林郁さんの『満州・その幻の国ゆえに 中国残留妻と孤児の記録』^{＊8}『大河流れゆく―アムール史想行』^{＊9}や『満州分村移民を拒否した村長佐々木信綱の生き方と信念』^{＊10}大日向悦夫著^{＊10}などを読みかえす日々だ。

九〇歳、一〇〇歳になる体験者たちが語り残そうとしている、関係者が死んだことでやつと口を開き始めた人々もいる。満蒙開拓という侵略

と棄民政策をもっと知らなければならぬという思いでいっぱいだ。



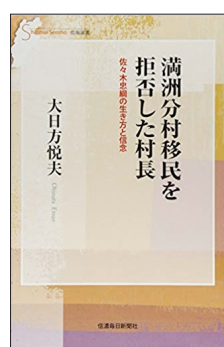
＊ 1



＊ 8



＊ 9



＊ 10

- ＊ 1 映画「ひろしま」(2019年8月17日放映) 出演：月丘夢路、岡田英次
監督：関川秀雄 104分 DVD 3,241円
- ＊ 2 「忘れられた“ひろしま”、～8万8千人が演じた“あの日、～” 2019年8月10日放送
再放映予定：2019年10月24日午前0時00分、60分
- ＊ 3 NHKスペシャル「かくて自由は死せり ある新聞と戦争への道」2019年8月12日放送
- ＊ 4 NHK ETV 特集「自由はこうして奪われた 治安維持法 10万人の記録」2018年8月19日放送
vimeo.com で視聴できる。
- ＊ 5 NHKスペシャル「村人は満州へ送られた～“国策、71年目の真実” 2016年8月14日放送
- ＊ 6 NHK ETV 特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」 2017年8月5日放送
- ＊ 7 NHK ETV 特集「彼らは再び村を追われた 知られざる満蒙開拓団の戦後史」2019年3月23日放送
- ＊ 8 林 郁著『満州・その幻の国ゆえに 中国残留妻と孤児の記録』1983年、筑摩書房刊
- ＊ 9 林 郁著『大河流れゆく―アムール史想行』1988年、朝日新聞社刊
- ＊ 10 大日向悦夫著『満洲分村移民を拒否した村長 佐々木信綱の生き方と信念』2018年、信濃毎日新聞社刊

編注) 取り上げられたドキュメンタリー番組は1部をのぞいて再放映の予定はなく、オンデマンドでも扱っていない。
NHKに再放映再々放映のリクエストを！



性暴力が民主主義社会の構築を妨げる

角田由紀子

長崎市事件

全国的にはあまり知られていないが、この春長崎地裁に提訴されたある民事事件がある。それは、一二年前に起きた長崎市幹部による女性取材記者に対する性暴力事件で、被告は長崎市だ（長崎市事件）。長崎市を訴えたのは、この事件は職務上の優越的地位を濫用した事案であり、その後の二次被害を市が防ぐことをしなかったというものである。私はこの弁護士の一員である。

二〇〇七年七月、長崎市原爆被爆対策部長（当時）が長崎市平和祈念式典に関する取材をしていた女性記者に性暴力を振るった事件である。被害に遭った記者は、心に深い傷を負った。労働基準監督署が二〇一五年に「業務上災害」の認定をしている。

長崎市では毎年の平和祈念式典は市を挙げての大きな国際的行事である。この年のそれは、先立つ長崎市選挙で市役所職員であった田上氏が市長に当選したことで全国的な注目を集めていた。田上氏の前任市長は選挙運動中に銃撃され死亡したという経過があった。市長になったばかりの田上氏にとって、初の平和祈念式典であった。長崎市には、原爆被爆対策部長という役職があり、被爆者問題から平和祈念式典までの行事等をすべて統括している役職である。この年の平和祈念式典では、銃殺された前市長の追悼と合わせて平和宣言を行うことになっていた。この年は、参議院議員選挙の年であり、選挙の結果自民党は大敗を喫し、民主党から江田五月氏が参議院議長に選出された。平和祈念式典には毎年内閣総理大臣、衆参両院議長、主要国会議員のほとんどが出席することになっていた。この式典は長崎市にはその年で最も対外的に重要な行事である。

長崎市を取材対象とするある報道機関の女性記者（本件での被害者）にとつては、原爆被爆対策部長は重要な取材対象であった。七月末、平

和祈念式典についての取材のため、被害者は加害者に会い、性暴力の被害を受けた。八月九日は目の前であり、被害を受けながらも記者は仕事をこなした。当然、激しい心身の不調との格闘の中での仕事であった。一〇月末、長崎市の内部調査が始まった直後に加害者が自死し、加害者と親しかった別の市幹部が被害者の中傷する様々な風説を流し、週刊誌等は競ってこれを垂れ流し、その「情報」はネット社会で極限まで増幅され、被害者は長年にわたり二次被害に苦しめられた。

被害者と長崎市との問題解決の交渉は結局実を結ばず、被害者は二〇〇九年に日本弁護士連合会（日弁連）に、人権救済申し立てを行い、日弁連はこれを受けて調査を行い、二〇一四年二月、以下の事実を認定した。①原爆被爆対策部長が「職務上の優越的地位」を濫用して記者に性暴力を振るい人権侵害をした。②別の市幹部も被害者を貶める虚偽の情報を広めて二次被害を引き起こした。

そのうえで、日弁連は長崎市に被害者への謝罪や再発防止策を勧告したが、市は受入を拒否し続けたため、

被害者はやむなく二〇一九年四月、市に損害賠償及び謝罪を求めて提訴した。被害者は今日に至るも元のようない記者活動に復帰できていない。この事件は、被害者の属する新聞労連が精力的に支援しており、裁判期日での傍聴支援や報告集会等が行われている。次回の口頭弁論は、一月一八日（月）午後四時半から長崎地裁民事部で開かれる。お近くの方はぜひ、傍聴および報告集会にご参加を。

加害者が死亡したら事実確認は一切できないのか

本件に対する長崎市の態度は一貫して、本人が死亡しているので事実確認は困難というものである。事件から一二年もの間被害者が重いPTSDに罹患している事実についても事件のもたらしたものと理解できないようだ。加害者本人不在という同じ事実関係の下、なぜ、労働基準監督署は、労災認定ができたのか。

長崎市の責任は重い。重篤なセクハラ事件を職員が優越的地位を濫用して起こしたのだから、事業主としての責任は明らかであるし、二次被

害の防止も行わなかった。本人の死亡事実を隠れ蓑にして核心の事実を確認できないので、責任を認めないという弁明はさすがに二〇一九年では許されないだろう。この論法では仮に本人が生きていても否認すれば、事実を確認できないことになり、あり得ない弁明である。刑事事件でも被告人が自白しないから有罪を認められないという奇妙な結論はあるまい。

暴力が引き起こしたものはなにか―セクハラ事件で起きていること

まず、一般的に言って性暴力は何を引き起こすかを確認しておきたい。次のような経過をたどる。性暴力↓被害者の心身の健康破壊↓働くことを奪う↓生存を脅かす（三段階の人権侵害）。本件でもこの経過をたどっている。加えて、被害者が記者であった場合には、個人的な被害を越えて、記者への加害行為は、報道の自由を奪い、人々の知る権利を奪い、民主社会の建設を妨害する。東京新聞・望月衣塑子記者への菅官房長官の取材妨害も、暴力であることは明らかであり、女性記者であつ

たことと無関係ではないだろう。今回、新聞労連が組合として取り組んでいるのは、この観点を重要とするからだ。今では女性記者が増えているが、彼女たちへの攻撃は、私たち主権者への攻撃である。女性記者が増えてきたので、二〇一九年春に続いた不当な性暴力判決が広く知られるようになってきた。男性記者ばかりであれば、あのようなメディアの動きは期待できなかったかも知れない。

二〇一八年四月、当時の財務省事務次官によるテレビ記者へのセクハラ行為が発覚したが、市民の知る権利の侵害にはあまり関心が示されなかったのではないか。報道する人への性暴力は、個人の被害を越えて、民主主義社会の構築を妨害するものであることが認識されねばならない。

財務省事件をきっかけとして、性暴力が女性記者の普遍的な経験であったことが再確認され、個人的なものと見逃し、我慢し蓋をしてきたことが、被害を継続させてきたことにつながったという反省が経験者たちから語られ、沈黙することが次の被害を許すことに加担する結果を

生む構造が認識され、二〇一八年五月、「メディアで働く女性ネットワーク」(WIMN)が結成され活動している。

被害者からのメッセージ

以下に「長崎市幹部による性暴力事件の被害者を支える会」のリーフレットに掲載されている被害者からのメッセージの一部を紹介する。

「女性にとって性的攻撃にさらされることは常に恐怖です。女性記者の数は増えていますが、取材で会うのは役職ある年上男性が多く、ハラスメントにあいやすい。働く場に加害者が悪びれずにいることは財務次官のセクハラからも明らかです。

また、性犯罪は被害者への中傷が起きやすい特徴があります。性被害が興味・蔑視の対象とされる風潮が強いです。当事者が前面に出るのはなく、メディア労組が先頭に立つてこの構造的暴力に取り組むことは、今後の被害者救済の仕組みづくりにもつながると感じています。

長崎で働くとき、歴史の重みを考えて自分にできるか不安でした。被爆者の苦悩にふれて自分

の理解不足を痛感しながらも、戦争を生きた人々の記事を書き続けよう取り組みました。それが途絶えたのは八月九日の式典に向けた取材中の襲撃。まさかの長崎市平和行政トップの性暴力でした。

傷ついた人に寄り添う街じゃなかったの？ 混乱と絶望で逃げたあの日から一二年。いま法廷で長崎市と対峙します。

「今ごろ提訴なんて」と言う人もいるかもしれませんが。しかし、二次被害に苦しめられて、全体を把握するのに年月がかかりました。住まいを無くし、仕事はできず、治療に時間とお金を使い、家族や友人との関係もぎくしゃくしました。どれも事件がなければ経験しなくてすんだことです。」

二〇一九年一〇月一六日

(了)



最近の日韓・日朝関係について考える

——二つの集会から

伊東 輝

経済学者金子勝さんのスピーチ要旨 ——八月三十一日「韓国は敵なのか」より

今回の日韓関係悪化は、本年七月

本年七月一日に日本が韓国への半導体素材輸出規制措置をとって以来、日韓両政府は互いに対抗措置をとって、市民レベルで韓国では日本製品不買運動が広がったり、日本では連日韓国批判を繰り返して、旅行客も激減するなど、今までになく悪い状況になっている。そんな中、八月三十一日、「韓国は『敵』なのか」——輸出規制を撤回し対話での解決を*1

九月一七日、日朝平壤宣言一七周年朝鮮半島と日本に非核・平和の確立を！ 日朝国交正常化交渉の再開を！*2

が開かれた。その全体の様子は、YOUTUBEで視聴できる（欄外注参照）。多くの貴重な提言がなされたが、ここでは次の提言を私なりに受け止めて紹介する。

今回の日韓関係悪化は、本年七月一日の日本による半導体素材三品目（フッ化水素など）の輸出規制措置から始まった。経産省が外務省抜きに動いたとも言われているが、これは原発輸出失敗、官民ファンド失敗などを隠すためと言ってもよい（有機ELテレビ※はもとともソニーが開発したが、官民ファンドが日本のデバイスメーカーを育てられず、韓国のサムソンなどが世界でシェアを伸ばすことになった）。そこにいわゆる「元徴用工」裁判問題で韓国が強い姿勢であったことから、日本は報復の意味もあつて半導体素材三品目の輸出規制措置をとったが、経済問題に政治問題を絡ませることはWTOには認められないので「安全保障の観点から不適切な事案があった」と説明するようになった。その一つはフッ化水素をサリンに利用しているというものだが、日本から輸出しているフッ化水素は高純度で高価なもので、サリンに利用しないはずである（仮に利用するとすれば

中国製のコストの低いものを使うはず）。そして証拠を示さないまま一五六品目もホワイト国（輸出管理に関する優遇措置をとる国）適用から外した。

そして八月はフッ化水素の対韓国輸出は八四％減っている。一九九七年の韓国経済危機の時にニコンはサムソンに六億円の現金払いを条件にして、応じられないサムソンは他国から調達し、その後ニコンとの取引はしなくなった。同じようなことがまた起きかねない。韓国ではヨーロッパのメーカーと取引しようとする動きが出てきている。韓国は日本にとって三位の輸出相手であるのに、日本が政治を絡ませて貿易をつぶしてしまふことは若い人達の職場を奪うことになる。したがってまず経済の問題は政治問題・歴史問題と絡ませずに解決し、次に政治問題・歴史問題の話し合いをすべきである。

※有機ELテレビは液晶テレビと違って発光などに必要な放電スペースが不要で、五ミリという薄さである。また一画素ごとの明るさを調整でき、次世代テレビと言われている。

カン・ヘジョンさん（アジアの平和と歴史教育連帯国際協力委員長）のスピーチ要旨

——九月一七日「朝鮮半島と日本に非核・平和の確立を！」より

今年に入って、特に六、七月以降の日韓の市民の不信感は今までになく大きい。これは現状認識の隔たりからくると思われる。韓国では変化に対して、平和民主主義の拡大（一九八〇年代の民主化運動、一九九〇年代冷戦終結の後には女性問題、「慰安婦」問題、障害者問題などへの取り組み。「元徴用工」裁判もその流れの中で提起された）と見るが、日本では「ゴールポストを動かす」「約束を守らない」などと見る。これが、市民的価値の共有に基づく連帯（韓国）と、政府・国家目線の「国民」対立（日本）という見方の違いにもなる。日本が強調する一九六五年の日韓条約体制は当時の限界を持つており、新しい枠組みで考えるべきだと思う。

以上の背景を踏まえたうえで、市民の「不買運動」などを見て、市民の役割を考えたい。日本の輸出規制後韓国で動いたのは市民である。組

組織されたものではなく、SNSを通じて日本製品に替わる製品を紹介するなどの動きがあった。キャンドル革命で意志表示が力になるという経験を持った市民が始めたもので、政権が煽ったのではない。「覚醒した集団的知性」と言ってもよい。ある韓国人男性が日本人女性に暴行した件では、市民は「やめろ」「警察は早く動け」と反応したし、中区で「No Japan」の旗を掲げた時も市民は批判し、自治体や政府が煽っているのではないことを示すために撤去を求めた。四時間後に自治体は旗を撤去した。その後市民の「No Abe」が広がった。

日本にも同じ「覚醒した集団的知性」を持った人たちがいることを韓国の市民は知っている。支配する力に向かって共に手を取りたいと考えている。国家間の問題にするのではなく、同じ価値の実現と考えれば、小さなことはおおらかに受け止めていけると思う。

安倍政権は今年だけでなく、昨年からの朝鮮半島の動き、米朝の動きを喜ばず、むしろ邪魔をしているように見える。韓国では第一回米朝会談の後、小学生が友達と「これで

僕たち徴兵されなくてよくなるね……」と喜んでいた。平和を願う朝鮮半島の動きは日本のためでもある。日本の市民が動いてほしい。拉致問題解決にしても日朝の平和条約が必要である（拉致問題が明らかになったとき、韓国では「これで日本も被害者の立場を理解できるようになるだろう」という期待が広まったが日本はそうならなかった）。

今後米朝の動きから一気に朝鮮半島の事態が動く可能性もあるが、その時安倍政権が主導して一九六五年の日韓条約のような形にしないよう、市民は「どういう形にするか」を考えておいてほしい。

私たちにできることゝまず理解し、考えること

以上二人のスピーチを聞いて、事実に基づく議論が大切であり、そこから解決への糸口を見つけることが可能であると感じた。そこで一つ、いわゆる「元徴用工」裁判について次の点を付記する。現在の日本政府は、この原告らの損害賠償責任について、一九六五年の日韓請求権協定（日韓条約とともに結ばれた）で解

決済みと主張するが、一九九一年の国会審議で柳井俊二条約局長(当時)は「……日韓請求権・経済協力協定の二条一項、三項の規定は、両国民間の財産・請求権問題につきましては日韓両国が国家として有している外交保護権を相互に放棄したことを確認するものでございまして、いわゆる個人の財産・請求権そのものを国内的な意味で消滅させるものではないということは今までも答弁したとおりでございます」と述べている。また、国際人権法の発展などから見て、個人の請求権は消滅させることはできない、というのが国際的な見方である。これを基に話し合いをしてほしい。

最後に、カン・ヘジョンさんの「……市民は『どういう形にするか』と考えておいてほしい」という言葉に込めるべく、朝鮮戦争の終結や南北和解の進展など、隣国である朝鮮半島のこの先の動向に常に関心を向け、私たちひとりひとりが考え、話し合う必要があると思う。

(二〇一九年一〇月四日)

* 1 <https://www.youtube.com/watch?v=FQdAivP89vo> (前編)

<https://www.youtube.com/watch?v=FQdAivP89vo> (後編)

* 2 <https://www.youtube.com/watch?v=OUtZjQ1rT44&feature=youtu.be>



「米軍が最も恐れた男」
アメリカ

その名は、カメジロー

「米軍が最も恐れた男」

カメジロー 不屈の生涯

——希有な政治家を通して沖縄の抵抗の精神に触れる

三井ふみよ

この映画のことを知るまで、沖縄に瀬長亀次郎という政治家がいたことを私は知らなかった。恥ずかしいことだ。一作目（「米軍が最も恐れた男」）を見逃してしまったので二作目（「カメジロー 不屈の生涯」）はぜひ、と思ってむりやり時間をつくって出かけた（私からすれば辺鄙な渋谷の上映館まで、うちから片道二時間半はかかるのだ）。衝撃を受け圧倒された。瀬長亀次郎さんというまれなる魅力的な人物に。占領軍である米軍のすさまじい沖縄支配と圧政に。カメジローのことを知らなければ沖縄についてなんにも知らないのと同じことだったのだ。実に恥ずかしい。

一本目は、現在の辺野古基地建设

反対闘争の原点ともいえるカメジローの政治家としての軌跡を辿る。もとは二〇一六年にTBSが放映したドキュメンタリー番組で、非常に高く評価されたのを受け追加取材・再編集を経て映画化された。二本目はカメジローの人物像をもっと知りたいという観客からの要望にこたえ続編として制作されたという。監督は両作とも佐古忠彦さん。TBSのニュース23など報道番組で活躍してきたテレビマンだ。一本目の要素もたくさん入っているから二本目だけ観るのでもいいよと友人は教えてくれたが、心を激しく揺さぶれた本を読んで同じ作家の他の本を読みたくなるように、前作もどうしても観たくなつてDVDを購入した。ここでは二本を観ての感想を記す。

瀬長亀次郎さんは一九〇七年、現在の沖縄県豊見城市に生まれた。ハワイに出稼ぎにいった父親からの仕送りで中学から高校へ、さらに医学を志して現在の鹿児島大学にすすむが社会主義運動に加わったことを理由に放校される。貧しい人びと、弱い立場の人びとへの共感若しくは、深く、自分の生活をかえりみずに

人を助けようとする彼のやさしさは人びとに強く印象づけられていたようだ。その後労働争議を指導したとして治安維持法で検挙され投獄される（一九三二年）。新聞記者になるも兵役へ。戦後は新聞社などで働く。沖縄人民党結成に参加し、一九五二年琉球政府の第一回立法議員選挙に立候補し最高得票で当選。このとき星条旗への議員宣誓を拒否し、占領軍から睨まれることになった。

ときは朝鮮戦争のただなか、沖縄そして日本の「赤化」を恐れた米軍にとつて、人びとに敬愛され、信頼と支持を集める瀬長亀次郎は、脅威の存在だったようだ。彼を共產主義を蔓延させる疫病と憎み、くわえた弾圧のすさまじく、民主主義を標榜するアメリカの裏の顔、人権をないがしろにする冷酷な軍の論理をこれでもかと見せつける。「アメリカはネコ、沖縄はネズミ」と平然と公文書に記す米軍。沖縄や日本への、その差別意識もまた強烈だ。それに対しカメジローは昂然と立ち向かう。「どうしたらネズミは巨大なネコに噛みつくことができるか」と。

彼は雄弁家で、「退屈で陳腐な言葉はなく、生き生きと歯切れよく」

語りかけた、これもまた米軍の記録。演説会のたびに数万人の人びとが集まり、カメジローの言葉に聞きほれ、終わってからも拍手と歓声は延々と続いたそう。飾らない言葉で信念をそのままに、まっすぐに語りかける演説。聞く人はまさに自分がそう言ったかのように感じ、みなニコニコしながら帰っていったという。そのようなカメジローを米軍が排除しようとするほど、民衆は憤り、抵抗は増す。そうしてカメジローは抵抗の象徴となつていった。結局カメジローという「殉教者」を出してしまったのは、自分たちの「失敗だった」と後に米軍は認めたそうである。

沖縄が日本に復帰する二年前、一九七〇年に沖縄初の国政参加選挙が行われた。立候補したカメジローは沖縄県選出の衆議院議員となり、以後七期を連続当選、二〇年つとめて一九九〇年に勇退する。

映画は、よく読み、書き続けた文人瀬長亀次郎の姿も伝えている。本の詰まった書棚に囲まれ机に向かうカメジロー。生涯書き続けた日記は二二〇冊。投獄中などに家族と交わした手紙も数多い。二作目制作にあ

たり、佐古監督はこれらの手紙や日記を読み込むのに長い時間をかけたそうだ。

議員辞職後、瀬長氏は脳梗塞でたおれ、長い闘病生活の後、九四歳で逝去した。残された肖像写真の多くはにこやかで知性的、あたたかい人柄を感じさせるが、晩年のある写真は眼光鋭く、物事の本質をとらえ先を見通す強い意思を老いても失わなかったことを物語っている。その眼差しは、瀬長亀次郎と民衆の闘いの資料を集める「不屈館」の館長、次女の内村千壽さんにも受け継がれている。占領下、カメジローと共に支配者米軍と闘った沖縄の人びとの抵抗の精神を、カメジローは「不屈」と呼び、好んで書に記した。その人びとは彼を「不屈の人」と呼ぶ。

「この沖縄の大地は、ふたたび戦場となることを拒否する！ 基地となることを拒否する」

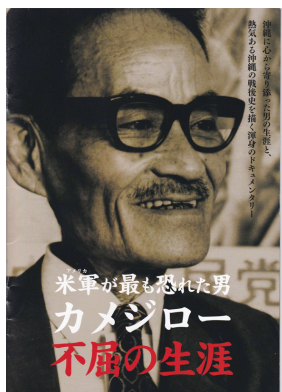
一九七一年、議場で当時の首相佐藤栄作に対峙し、傲然とつきつめた言葉である。この映画の圧巻のシーンだ。

沖縄から、日本から基地がなくならないかぎり、平和はない、とカメジローは言った。だが、いまだに基

地は日本中に存在する。沖縄の民衆の抵抗とカメジローの闘いを経験し、米国はより巧妙に日本を支配し、制圧しているように思える。もはや日本自体がアメリカの基地となっているのではないか。長い間、沖縄を犠牲に平和を享受してきた「本土」の私たちに、その実態が見えてくるだろうか。そして沖縄の人びとのように不屈の精神で抵抗することができるだろうか。カメジローはあの鋭い眼差しで、そう問いかけているように思う。



「米軍が最も恐れた男
その名は、カメジロー」 DVD 107分



「カメジロー 不屈の生涯」は各地で上映中。

-----FB & ブログから-----

8月から一票で変える女たちの会の『ホームページで「かわらばんブログ」を始めたのですが、担当者の不手際でブログの更新が間に合わず、今回はFaceBookで紹介したイベントを1件紹介します。

◆高校無償化からの朝鮮高校排除に反対する連絡会から集会とパレード参加の呼びかけです。

＜朝鮮幼稚園はすしに NO ! すべての幼児に教育・保育の権利を！ 11.2 全国集会 & パレード＞

日時：2019年11月2日（土）※雨天決行

集会開始 13:00 パレード出発 14:30 (15:30 終了見込)

会場：日比谷野外音楽堂（地下鉄霞が関駅・日比谷駅・内幸町駅・JR有楽町駅・新橋駅）

主催：11.2 日比谷集会実行委員会（問合せ先：フォーラム平和・人権・環境 03-5289-8222）

構成団体：平和フォーラム／朝鮮学園を支援する全国ネットワーク／高校無償化からの朝鮮高校排除に反対する連絡会／

日本朝鮮学術交流協会／朝鮮幼稚園保護者会・全国連絡会／朝鮮学校オモニ会・全国連絡会／朝鮮学園理事会・全国連絡会

◇内容：主催者挨拶（平和フォーラム）来賓挨拶・各政党挨拶・問題提起（朝鮮幼稚園教諭・保護者、日本側運動団体）

連帯挨拶（ブラジル人学校）・アピール採択



『一票で変える女たちの会』かわら版

*印刷版をご希望の方は左記FAX、メール、ホームページの問合せ欄からご連絡ください。

★投稿大歓迎！

本や映画の紹介、地域での活動報告、選挙や地域の政治の動き、情報、ご意見なんでもお寄せください。（一本について二〇〇字〜一六〇〇字）

宛先：1pyodekaeru@gmail.com

郵便：〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1の1

東京ボランティア・市民活動センター

メールボックスNo. 45

FAX：03-5684-1412

☆カンパのお願い

私たちの活動に賛同する皆さん、ぜひカンパを寄せていただきたく、お願いいたします！

郵便振替口座：

記号番号 00110-6-420003

口座名称 一票で変える女たちの会
イッピョウデカエルオンナタチノカイ

銀行等から振り込む場合：

店名(店番) 〇一九(ゼロイチキユウ)

店 (019)

預金種目 当座

口座番号 0420003

